

二〇二〇年は、気候変動による甚大な自然災害の多発、新型悪性感染症の世界的蔓延、新自由主義経済が招来する貧富差の拡大、国家・民族・人種間の分断、民主主義の脆弱さの露呈、そして核兵器を中心とする軍事力拡大競争など、人類の生存に関わる自然と人為的な脅威が多発した年、危機下の一年として、いずれ回想されることになる。そのような一年を、文学に関わる者として我々はどうか過ごしたのか。将来そう問われたときに、何と答えるべきか。中古文学研究という場において、我々は何をなし得たのか、あるいは何をなそうとしたのか。

本書は、この問いに対する回答を研究論文集として一書にまとめ、広く江湖に提示するものである。幸いなことに、この趣旨に賛同し寄稿してくださる方々に恵まれ、当初の予想をはるかに超える圧倒的な質量が実現できたことに、いま深い感慨を覚えざるを得ない。

本書刊行のそもそものきっかけは、武蔵野書院主前田智彦さんからの慫慂であった。私が、三九年間勤務した大学を定年により退職するに際し、その記念論集の編纂を考えてみてはどうかというご提案であった。たいへん有難いお勧めではあったが、私自身の研究者としての能力と実績に比して、それが到底及びもつかない事態であることは、誰よりも自分自身が最もよく分別している。おおけない、というのが率直な気持ちであった。それにもかかわらず、結局お受けすることになったのは、私の固辞を跳ね返す前田さんの粘り強い再三にわたる働きかけによる。

本書の編集にあたっては、個人の退職記念という枠を越え、危機的現状を前にして怯み佇むことなく、中古文学研究の火を高やかに燃やし続けた証しとしての論文集となることを目指した。執筆をお願いしたのは、中古文学会の中

核で優れた業績を上げ続けている方々、最前線で目覚ましい成果を上げている方々、そして私の身近な方々である。二〇二〇年五月末に執筆をお願いして、一月末が締切というきわめて緊迫した日程の中で、力作が続々と寄せられる様は壮観でさえあった。困難との戦いに果敢に挑んでくださった執筆者の方々に、心よりの御礼を申し上げます。そして、本書が中古文学研究の進展に大きく寄与し得ることを確信して已まない。

発起人の神田龍身さんは大学院への同期入学以来の敬愛する畏友、福家俊幸さんは専門分野を同じくする同門同研究室の後輩の白眉、外山敦子さんは勤務先における同僚かつ出藍の後継者であり、この三人の方々が発起人をお務めくださったことは、私にとって何よりの誇りであり、また喜びである。深く感謝申し上げます。

そして、武蔵野書院主前田智彦さんには、重ねて心からの謝意を捧げなければならない。その直接の指揮により、編集日程が超絶的に短縮され、本書の刊行は予定よりも早期に実現されることとなったのである。同社編集スタッフの皆さんの緊密なチームワークを讃え、また、お一人お一人のご尽力に末筆ながら謝意を表したい。

二〇二一年一月二四日

久保朝孝

## 目次

まえがき	久保朝孝 1
河内本源氏物語の校訂方法	
——若紫巻を中心として(上)——	浅尾広良 11
散佚物語「あまのもしほび」について	
——物語と戦乱——	浅田徹 27
『源氏物語』研究の遠近法	
——コロナ禍を契機に考える——	安藤徹 43

「契り」と「宿世」	乾澄子	59
——『夜の寢覚』論に向けて		
異界と現実を橋渡す古代物語を読む		
——二〇二〇年の試みから	井上眞弓	75
紅葉賀の行幸		
——平成の『源氏物語』研究の源流をさぐる	今井上	89
『狭衣物語』異本系本文の世界		
——「親子の情」に見る改変の論理	今井久代	105
古典教育から考える、見えない「疫病史」		
——『枕草子』における授業実践から	勝亦志織	121
『枕草子』の〈菖蒲・あやめ草〉		
——「アンチエイジング」の言葉	亀田夕佳	137
オンライン時代の学会運営とICT活用		
——中古文学会のオンラインシンポジウムを企画して	河添房江	151
『源氏物語』の終り方		
——浮舟Ⅱ落下したかぐや姫	神田龍身	165
『紫式部日記』の成立		
——読み手の想定を手がかりに	(補遺)	
	久保朝孝	181
早稲田大学図書館蔵富士谷成孚書入れ本『源氏物語』について		
——書入れに見える父・成章の影響と成孚独自の源氏学の進取性	栗山元子	193
危機下の「文」の機能とその力		
——空海の場合	河野貴美子	207
『土佐日記』誤写考		
——『貫之自筆本』本文を疑う	後藤康文	223

中古文学と学習指導要領の改定

——二〇一九年度中古文学会秋季大会シンポジウムを振り返る——……………小森 潔 239

「女」の時間の『とはずがたり』

——分裂をつなぐ主人公二条——……………斎藤菜穂子 253

『栄花物語』〈世の中騒がし〉小考

——疫病の流行をめぐる表現として——……………桜井宏徳 269

『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の主人公と女房たち

——異質さとのかわり方——……………陣野英則 283

今上帝はなぜ、いつまでも譲位しないのか？…〈朱雀王統〉と薫・その二……………助川幸逸郎 297

『紫式部日記』の歌の場面を読む

——歌の背景に思いを寄せて——……………鈴木裕子 313

『古今和歌集』の羈旅歌について

——旅の歌の創造——……………鈴木宏子 327

蜻蛉日記における外出と自然賞美

——付、「紅葉狩」考——……………高木和子 341

『大鏡』天変地異に見る歴史認識

——怨霊と疫病——……………高橋麻織 355

扇をさし隠す夕霧

——『源氏物語』「夕霧」巻における夕霧の小野再訪をめぐって——……………竹内正彦 369

歌舞伎から『源氏物語』を考える

——長編性と短編性——……………田坂憲二 385

『源氏物語』若菜巻の〈ぬるし〉と六条院

——迫りくる危機を警告する〈装置〉として——……………外山敦子 399

関屋巻の音風景

——「音泣く」空蟬の変容と逢坂の関——……………内藤英子 411

『枕草子』「小白河結縁八講」章段攷

——散文化した〈歌ことば〉の機能——……………中田幸司 425

読みの「ゆらぎ」と古典化の力学

——『狭衣物語』による『源氏物語』若紫巻の再構成をめぐる——…中西智子 439

このような時代に、文学を読み、学び、研究すること、  
あるいは文化と関わること——COVID-19を映し鏡として——……………新美哲彦 455

『紫式部日記絵巻』に描かれた装束についての検証

——装束描写の文字化と冬の冠直衣姿——……………畠山大二郎 469

かぐや姫の帰郷の論理・話型で読む『竹取物語』

——「どのように」語られているのか・〈語り〉と〈言説〉の再検討——…東原伸明 485

平安私家集の古写断簡

——存続と資料価値の付加——……………日比野浩信 499

丸山眞男「忠誠と反逆」に導かれて、  
日本版「リベラル」の可能性を古典テクストのうちに探る

——二〇二〇年度後期「文学」講義シラバス——……………深沢 徹 515

『和泉式部日記』とゴシップ

——宮は軽率なのか——……………福家俊幸 531

「聖徳太子の家」考

——『平中物語』三六段の謎解き——……………本田恵美 547

『土佐日記』の海賊

——姿を現さない危機——……………松岡智之 561

『源氏物語』柏木の結婚について

——父太政大臣の野心——……………松本美耶 575

『堤中納言物語』「花桜折る少将」末尾の解釈

——「中将の乳母」は本当に姫君の乳母なのか？

山田利博 587

室生犀星の王朝小説〈虫姫物語〉

——「虫の章」「何処の野に」「虫姫日記」から

横溝博 603

『山路の露』小考

——『源氏物語』の「最終巻」として

吉井美弥子 619

あとがき

本論集発起人

神田龍身  
福家俊幸  
外山敦子

執筆者紹介

639